

偽・盲目少女も異世界
から来るそうですよ？

こいこいさどこい

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

問題児の他に訳あり盲目少女も完全無欠の異世界に呼ばれ黒ウサギを更に苦勞ウサギにしてい〜！

「いやいや、なりません！」

「なりません」

「なりませんって言うてるでしょうが！」

目次

邂逅	1
嘘と水神	11
真実と白夜叉	19
妖刀と外門	28
太陽と白夜	35
試練と決闘	41
天須 伊邪那のすてーたす	48

邂逅

和を基調とした家の一室に一人白髪少女は、瞑想していた。

「……ZZZZZZ……」

……いや、寝ていた。

彼女の容姿を見ると、長い白髪は邪魔にならないように後ろで一つに結んであり服装は、動きやすいように工夫された桜吹雪が描かれている黒い和服である。一つだけ奇妙なところを上げるならば、その細くか弱そうな腰には当体似合わない刀があった。

「ふあ…… おや？もうこんな時間でしたか、少し一休みのつもりでしたが寝すぎてしまいましたね」

そう言つて立ち上がり外の方へ歩いていくがその彼女の目は塞がったままであつた。そう、彼女はとある事情により盲目の生活をしているのだ。

「眼を使わない生活も十分に慣れてきましたね、まあもともとそういうつもりでいましたので支障になりませんが……」

そう言うのと彼女は台所に行き慣れた手つきで味噌汁を作り始め、出来た味噌汁とご飯を食べる。その姿は、本当に目が見えていないのかと疑うほど普通に過ごしていた。

「さてと……？おや？」

彼女がまた部屋に戻ろうとした時、少し空いていた窓から一通の手紙が入ってきた。「ふむ？これは手紙ですか？風に乗って入ってきたようですが……しかし、まるで私の家にそれも私の元に狙って来たようにも感じましたが……」

彼女は手で手紙の表面を撫でるとそこにある紙の材質のわずかな変化で宛名を読む。

『天須 伊邪那 様』……ご丁寧にふりがな付きで『あます いぎな』と書いてありますね。どうやら、この手紙の送り主は私宛に随分と珍しい投書をなさるお方のようなですね。少し興味が湧きました」

そう言うと、少女改め伊邪那は手紙を開けた。その時の顔は少し期待がこもっている笑みを浮かべていた。伊邪那が手紙を開けるとそこには、文字が書かれていた。『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。』

その才能を試すことを望むのならば、

己の家族を、財産を、世界の全てを捨て、

我らの”箱庭”に来られたし』

その瞬間光に包まれた。

「ヤハハハハ！」

「わ！」

「きゃつー！」

「ミニヤヤヤヤヤ！」

三人と一匹の悲鳴と笑い声が響いている中、伊邪那は一人冷静に判断していた。

（空気と言うか世界そのものが変わった感じがしますね？ こういうの初めてですが…それに私以外に三人……と一匹ですが、かなり高いところから落下している感じですが私を含めてですが大丈夫ですかね？ このまま地面に落下して…いえ、その心配はいみたいですね。幸いにも下に水があるようですし大丈夫？ なのかな？）

伊邪那がそんなことを考えていると、伊邪那を含めた四人と一匹は水膜の様なものに当たって水に落とされた。

—————

四人と一匹は岸に上がった。そんな中、黒髪リボンの少女と金髪ヘッドホンの少年が罵詈雑言を吐き捨てていた。

「信じられないわ！ まさか問答無用で引き摺り込んだ挙げ句、空に放り出すなんて！」

「右に同じだクソツタレ。場合によっちゃその場でゲームオーバーだぜコレ。石の中に呼び出された方がまだ親切だ」

「……………いえ、石の中に呼び出されては動けないでしょう？」

「俺は問題ない」

「そう。身勝手ね」

互いに「フン」と鼻を鳴らして服をの端を絞る、金髪ヘッドホンの少年と黒髪リボンの少女。

このやりとりを見て伊邪那は自分のびしょびしょになったお気に入りのお気に入りの和服を絞りながら、こんな喧嘩をこの二人はまたするんだらうなあと感じていた。

猫を拭き終えたららしい茶髪ヘアピンの少女は、自分の服の端を絞りながら、

「此処………何処だらう？」

と呟いた。

「さあな。まあ、世界の果てっぽいものが見えたし、何処ぞの大亀の背中じゃねえか？」

そのつぶやきに呟きに答える金髪ヘッドホンの少年はとりあえず、全員が服を拭き終えたのを確認して

「まず間違いないだらうけど、一応確認しとくぞ。もしかしてお前達にも変な手紙が？」

と聞いた。それに対して黒髪リボンの少女が答える。

「そうだけど、まずは“オマエ”って呼び方を訂正して。私は久遠飛鳥よ。以後は気を付けて。それで、その猫を抱き抱えている貴女は？」

「……………春日部耀。以下同文」

「そう、よろしく春日部さん。野蛮で凶暴そうなその貴方は？」

「高圧的な自己紹介をありがとよ。見たまんま野蛮で凶暴な逆廻十六夜です。粗野で凶悪で快樂主義と三拍子揃った駄目人間なので、用法と用量を守った上で適切な態度で接してくれお嬢様」

「取り扱い説明書をくれたら考えてあげるわ、十六夜君」

「マジかよ。今度作つとくから覚悟しとけ、お嬢様」

そんな彼らの様子を伊邪那はまたやつてるなあと感じながら刀を拭いていた。すると、そんな彼女に気付いたらしい十六夜が寄つてきて話しかける。

「で？さつきから静かに刀を拭いてるお前は？」

「おや？私で最後ですか？」

「ああ、そうだけ？」

そのことを聞くと、彼女は丁度拭き終えた刀を腰に差し直し自己紹介を始める。

「私の名前は天須 伊邪那です。これでいいですか？」

「よろしく天須さん」

そう自己紹介した伊邪那に返した飛鳥は一つ気になり伊邪那に聞いた。

「貴女、先ほどから目を閉じてるけど、どうしたの？」

「その事でしたらご心配無く、元々こうでして……俗に言う盲目と言うやつですので」

伊邪那がそう言うと、飛鳥は申し訳なきそうな顔をして

「ごめんなさい」と謝った。

「いえ、大丈夫ですよ」

と言つて彼女の謝罪に対して言っているところをヤハハハと笑いながら見ている十六夜。

それに対してイラツときたのか十六夜から顔を背ける飛鳥。

我関せず、無関心を装う耀。

まだ濡れている服が気になるのか服をまた絞っているマイペースな伊邪那。

そんな彼らを見ていた黒ウサギは思う。

(うわぁ・・・問題児ばかりみたいですね……………)

召喚しておいてあれだか、彼らが協力する姿はどうやつても想像がつかない。陰鬱そうに黒ウサギはため息を吐き彼らの前にどう現れようか考えていた。

そのためか、黒ウサギは気づけなかった。

伊邪那が刀に手を置いたままこちらの方を向いていたことに

—————

「で、呼び出されたはいいけどなんで誰もいねえんだよ。この状況だと、招待状に書かれていた箱庭とかいうものの説明をする人間が現れるもんじゃねえのか？」

「そうね。なんの説明もないままでは動きようがないもの」

「…………この状況に対して落ち着き過ぎているのもどうかと思うけど」

「いえ、私が言えたことではないですが… 貴女も十分に落ち着きすぎているかと思えますよ。」

そう言つて各々待たされ過ぎてイライラしてきたのか罵詈雑言を吐き始める。黒ウサギは最後に伊邪那が言つたことに対して

（全くです。目をつぶっている方は唯一の常識人なのでしょう）

と心の中で納得していた。

もつとパニックになつてくれれば飛び出しやすいのだが、落ち着きすぎているため彼女は出るタイミングを測れないでいた。

（まあ、悩んでいても仕方が無いのデス。これ以上に不満が噴出する前にお腹を括りますか）

黒ウサギが覚悟を決めた時ため息混じりに十六夜が呟く。

「―仕方がねえな。こうなつたらそこに隠れている奴にでも話を聞くか？」

今まきに出ようとしていた黒ウサギは、驚いても陰に隠れた。

「なんだ、貴方も気づいていたの？」

「当然、かくれんぼじゃ負けなしだぜ？そつちのお前らも気づいていたんだろ？」

「風上に立たれたら嫌でもわかる」

「元々ここにいる人数分の声と心拍音が一致してませんでしたから。あつ、今私達に気づかれていたことに気づいて心拍数が上がりましたね」

「へえ？面白いなお前達」

軽薄そうに笑う十六夜の目は笑っていない。伊邪那を除いた三人は理不尽な招集を受けた腹いせに殺気の籠った冷やややかな視線を黒ウサギに向ける。黒ウサギはやや怯んだ。

「や、やだなあ御四人様。そんな狼みたいなの怖いかつ

そこから先の黒ウサギの言葉は続かなかつた。何故なら、伊邪那が黒ウサギに刀を振るっているからだ。

「ヒヤアアアア!?!」

「おや？避けましたか？なかなか鋭いですね?」

「ちよつと、お待ちを!!私は貴方達を呼ばせていただいたものでございますヨ!?!」

「ふむ…： そうでしたか。てつきり猛獣か何かが私達を狙っていたのかと」

「さつき言いかけたことの続きにもつながりますがむしろ黒ウサギの天敵です。ええ、古来より孤独と猛獣はウサギの天敵でございます。なのでここは一つ穩便に、ONBI Nにお話を聞いていただけたら嬉しいのでございますヨ?」

「断る」

「却下」

「お断りします」

「いきなり斬りかかったお詫びもありますので、手短にならないですよ。」

上から十六夜、飛鳥、耀、伊邪那というふうに戻された黒ウサギはバンザーイと降参のポーズを取りながら、

「あつは、取り付くシマもないですね、あと最後の方ありがとうございました。」

と言った。しかしその目は冷静に四人を寝踏みしていた。

（肝っ玉は及第点、この状況でNOと言える勝ち気は買いです。まあ、扱いにくいのは難点ですけどもあと白髪の方は強いですね。刀を抜いて黒ウサギに斬りかかるまでとても速かったデスね…）

黒ウサギはおどけつつも、四人にどう接するべきか冷静に考えを張り巡らせていた。

すると、耀が不思議そうに黒ウサギの隣に立ちうさ耳を思いつきり引つ張った。

「えい」

「フギャー！」

それはもう、引き抜くぐらい引つ張った。

「ちよつと、お待ちを!!触るまでなら黙って受け入れますが、初対面で私のステキ耳を引き抜きにかかるとはどういう見ですか!？」

「好奇心のなせる業」

「自由にも程があります!」

「へえ?この耳本物なのか?」

今度は十六夜が右耳を、

「……………じゃあ私も」

「ちよつと、お待ちをー!!」

飛鳥が左耳を掴み引つ張る。黒ウサギは言葉にならない悲鳴をあげ絶叫する。そのとき我関せずのマイペースな伊邪那は、

「ZZZZZZZZ……」

話が進むまで寝ることにした。

嘘と水神

しまった……と伊邪那は思っているだろう。

なぜなら、それは今の現状を見ればわかる。

十六夜は何もかもを見下すような視線で一言、

「この世界は……面白いか？」

……そう、彼女は黒ウサギの説明を寝過ごして全く聞いていなかったのだ。伊邪那は場が落ち着くまで軽く寝ていよう程度の仮眠を取るつもりだったが、程よい太陽の日差しが彼女を深い眠りに落とした。

頭に違和感を感じて目を覚ますと、頭の上には鳥がとまっついていて黒ウサギの説明が終わり全員に質問をしている場面であつた。

他の二人の反応を感じ分かつたのは、恐らく十六夜が最後の質問をしているのだろうということぐらい。

そして十六夜の質問の『この世界は面白いか？』という質問の答えに対して期待の思いで返事を待っている感じだろう。

「YES。『ギフトゲーム』は人を超えた者達だけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世

界は外界より格段に面白いと、黒ウサギは保証致します♪」

この時、伊邪那は一つ疑問を感じた。この世界は箱庭と言うらしいが何故黒ウサギは『安心』しているのだろうか？自信満タンに今の言葉を言うならわかるが、伊邪那の黒ウサギから感じた心拍数や呼吸のリズムは安心した感じだったのだ。まるで何かを隠しているようなそんな感じがした。すぐに、確認を取ろうとしたが自分は寝てたため今の得られる情報だけでは判断しかねるため取り敢えず様子見をすることにした。

黒ウサギのコミュニティに向かう道中、十六夜が伊邪那に話しかけた。

「なあ、一緒に世界の果てを見に行かないか？」

本当なら、断って黒ウサギの隠していることについて調べたかったが世界の果てというものに興味が湧いた伊邪那は

「はい、わかりました」

「んじや、行くか。あつ、そうだ春日部にお嬢様。黒ウサギには適当に言つといてくれ」
「分かった」

「天須さん気をつけてね」

その言葉を聞いたあと、十六夜は伊邪那を抱えてすごい速度で走っていった。

十六夜に抱えられている時に伊邪那はあることが気になったので聞いてみた。

「十六夜さん、貴方は気付いていますか？」

「……へえ？じゃあ、お前も気づいたんだな黒ウサギの嘘に？」

そう試すように十六夜は伊邪那を見る。

「目が見えない代わりに他の感覚がいいもので、ちよつとした呼吸のリズムや心拍数で

嘘や動揺はわかるんです」

「なるほど、やつぱりお前面白いな」

「それで？いつ黒ウサギに話すんですか？」

「そうだな……、世界の果てを見たらとかでいいんじゃない？つと、はい到着」

十六夜とそんなことを話していると大きな滝の前に着いた。

「なかなか大きな滝だな」

「滝？確かに空気中に水分が多いので滝に来たと分かりましたが？ここが世界の果てで

すか？」

「いや、ここから歩いていこうと思つてな？」

黒ウサギにわざと追いつかせるためだろうことは分かった。そこで伊邪那は、寝ていて聞きそびれたことについて聞こうとした時水面から大きな蛇神が現れた。

『ここに人が来るのは珍しいな？どうだ、貴様らを試してやろう！試練を選ぶがよい』

「だそうですが、どうします?」

「はっ、俺がこいつを試しといてやるよ!お前はそこで見ていな」

その言葉を聞いて伊邪那は近くの木に寄りかかってこの経過を待つことにした。

—————

「もう、一体どこまで来ているんですか!」

あれからちよつとして十六夜が蛇神を沈めてすぐに髪の毛を緋色にした黒ウサギが追いついた。

「世界の果てまで来ているんですよ、つと。まあそんなに怒るなよ。しかしいい脚だな、遊んでいたとはいえこんな短時間で俺に追いつけるとは思わなかった」

「むっ、当たり前です黒ウサギは『箱庭の貴族』と謳われる優秀な貴族です。その黒ウサギが」

アレ?と黒ウサギは首を傾げる。

(黒ウサギが……… 半刻以上もの時間、追いつけなかった?)

黒ウサギはその事についていろいろ考えたがあることが気になり十六夜に聞いた。

「そう言えば、伊邪那さんはどちらに?」

「その木に寄りかかって寝てるよ、まあ蛇との戦いが詰まらなかったからな飽きちまったんじゃないの?」

そう言いながら、伊邪那の居る木を指差す。

「ふう、まあ何がともあれお二人共無事でよかったです。さあ、早く戻りつて……えっ？
今なんと？」

黒ウサギは伊邪那の所在を聞いた時になんかとんでもない事を言われた気がして思わず聞き返す。

「飽きちまつたんじゃねーの？」

「いえ、その前です」

「蛇との戦いが「そこです！……それが？」

出来れば黒ウサギの聞き間違いであつて欲しかったが、現実是非情である。

「その蛇様はここに住む水神様でございますよ!?!」

そう黒ウサギが言った瞬間、川面からその巨軀が現れた。

『まだ、試練は終わっていないぞ小僧オオオオ!』

「いったい何をしたらこんな怒らせられるんですかあー!?!」

ケラケラと笑う十六夜はことの顛末を話す。

「なんか偉そうに試してやると素敵なことを言ってくれたからな、俺を試せるのかどうか試させてもらったのさ。結果はまあ、残念な奴だったが」

『貴様……付け上がるな人間我がこの程度で倒れるかアアアア!』

蛇神がそう叫ぶと巻き上がる風が水柱を上げて立ち昇る。

「十六夜さん、下がっ「うるせえ、これは俺が売って奴が買った喧嘩だ手を出せばお前から潰すぞ?」っ」

『心意気は買つてやる、それに免じてこの一撃を防げば貴様の勝利としてやる!』

「寝言は寝ていえ、決闘は勝者を決めて終わるんじやない。『敗者を決めて終わるんだよ』」

その傲慢極まりのないその言葉に蛇神も黒ウサギも呆れて閉口した。

『ふん、それが貴様の最後の言葉だ!!』

竜巻く水柱は計三本。それぞれが生き物のように唸り、蛇のように襲いかかる。

「十六夜さん!」

黒ウサギが叫ぶがもう遅い。木々を捻り切り、十六夜の身体を激流に飲み込む!

「ハッ、しやらくせえ!」

十六夜は激流の中、ただの腕のひと振りで嵐を薙ぎ払ったのだ。たった一本を残して、そしてその一本は伊邪那のいる方へ向かっていく。黒ウサギはそれに気付いて伊邪那の方へ向かうが間に合わない。

「伊邪那さん!」

黒ウサギは叫ぶ、その声と同時に水柱が音もなく切り裂かれた。

「十六夜さん、わざとですね?」

目を擦りながら伊邪那が木の影から現れた。

「嘘!?!」

『馬鹿な!?!』

驚愕する二つの声。蛇神は全霊の一撃を弾かれ放心するが

、十六夜はそれを見逃さなかった。

「ま、なかなかだったぜお前」

大地を踏み砕く爆音。胸元に飛び込んだ十六夜の蹴りは蛇神の胴体を打ち、蛇神の巨軀は空高く打ち上げられ川に落下した。その衝撃で川が氾濫し水で森が浸透する。

また全身を濡らした十六夜は、ばつが悪そうに川辺に戻った。

「くそ、今日はよく濡れる日だ。クリーニング代くらいは出るんだよな黒ウサギ」

「あの、クリーニング代とかそんなのはいいので、私の方に残した攻撃について説明をしてください?」

冗談めかした十六夜の声や十六夜に対して文句を言っている伊邪那の声は黒ウサギに届かない。彼女の頭の中はパニックでもうそれどころではなかったのだ。

（人間が神格を倒した!?!それもただの腕力と刀のひと振りで!?!そんなデタラメが!）

ハッと黒ウサギは思い出す。彼らを召喚するギフトを与えた『主催者』の言葉を。

「彼らは間違いなく、人類最高クラスのギフト保持者よ黒ウサギ」

黒ウサギはその言葉をリップサービスか何かだと思っていた。信用できる相手だったが、ジンにそう伝えた黒ウサギ自身も『主催者』の言葉を眉唾に思っていた。

（信じられない…………… だけど、本当に最高クラスのギフトを所持しているのならば……………！ 私たちのコミユニティ再建も、本当に夢じやな気かもしれない！）

黒ウサギは内心の興奮を抑えきれず鼓動が早くなるのを感じ取っていた。

真実と白夜叉

「おい、どうした？ポーンとしてると胸とか脚とか揉むぞ？」

「え、きやあー！」

背後に移動した十六夜は黒ウサギの脇下から豊満な胸に、ミニスカートとガーターの間から脚の内股に絡むように手を伸ばしていた。押しつけて飛び退く黒ウサギは感動も忘れて叫ぶ。

「な、ば、おば、貴方はお馬鹿です!? 二百年守ってきた黒ウサギの貞操に傷をつけるつもりですか!？」

「二百年守ってきた貞操? うわ、超傷つけない」

「お馬鹿!!? いいえ、お馬鹿!!!」

疑問形から確定系に言い直して罵る。そこへ先程から無視され気味で少し不機嫌になっっている伊邪那が十六夜に不満を言う。

「いえ、貞操とかそういうものでもいいので私の方に攻撃をわざと残したことに ついて説明してください」

「ヤハハハ、お前のギフトってやつも見ておきたかったからな」

そう笑ってごまかす十六夜に黒ウサギは天敵かもしれないと思い、伊邪那は面倒そうなのを目をつけられたなと思った。

「と、ところで十六夜さん。その水神様はどうされます？と云うかまだ生きてますよね？」

「命までは取ってねえよ。戦うのは楽しかったけど、殺すのは別段面白くもないしな。 ”世界の果て”にある滝を見たら帰るさ」

「ならギフトだけでも戴いておきましょう。ゲームの内容はどうであれ、十六夜さんは勝者です。蛇神様も文句はないでしょうから」

「あん？」

十六夜が怪訝な顔で黒ウサギを見つめ返す。黒ウサギは思い出したように補足する。「神仏とギフトゲームを競い合う時は基本的に三つの中から選ぶんですよ。ポピュラーなのは ”力”、 ”知恵”、 ”勇気” ですね。力比べをする際は相応の相手が用意されませんが、十六夜さんは御本人を倒されましたから。きつと凄いものを戴けますよー。これで黒ウサギ達のコミュニティも今より力をつけることができますよー」

黒ウサギが小躍りでもしそうな足取りで大蛇に近寄る。

しかし、十六夜と伊邪那は不機嫌な顔で黒ウサギの前に立った。

「黒ウサギ、あなたの言っていることはギフトゲームとして間違いなく真つ当なことを

言っています。しかし、

「そう伊邪那が軽く殺気を混ぜながら黒ウサギに言うと、軽薄な表情が消えた十六夜が前に出る。」

「オマエ、なにか決定的なことずつと隠しているよな？」

「この言葉を聞いた時黒ウサギの表情が硬くなる。」

「……な、何のことです？箱庭の話やゲームの事ならお答えすると約束しま」ストツプです」つつ!？」

「なるほど、そういうことですか。確かに箱庭やゲームの事については答えると……ですが、肝心な事について誰も聞かなかったんですね」

「そうだな、でも取り敢えず俺がお前に聞きたいのはおまえの事、いや核心的な聞き方をするぜ。黒ウサギ達は どうして俺たちを呼び出す必要があつたんだ？」

表情には出さなかつたものの、黒ウサギの動揺は激しかった。

十六夜の質問は意図的に黒ウサギが隠していたものだからだ。

「それは……言つた通りです。十六夜さん達にオモシロオカシク過ごして「ダウトです」……何故そう言いきれるのですか伊邪那さん」

「それは、簡単です。言つたでしょう？私は目が見えない代わりにほかの感覚がいと……その立派な耳で聞いていたのでしょうか？」

そう言いながら黒ウサギの方へ試すような表情で向く。

「耳って、お前目が見えないんじゃないのか？」

「ええ、見えないですよ、ですがどういう訳か私は匂いでそのものの形がわかるのです。さすがに色まではわかりませんがね。まあ、これを抜きにしても私の質問への答えで嘘はわかりますが」

「へえ、じゃあその質問してみてくださいよ」

「ええ、黒ウサギ答えてもらいます。あなた達のコミュニケーションはどのような状態なの？ 私いえ、十六夜もだと思うけど黒ウサギが必死に見えます」

「!？」

その時、初めて黒ウサギは動揺を表情に出した。

「これは、俺の勘だが。黒ウサギのチームは弱小若しくは何らかのわけあって衰退したコミュニケーション何じゃねえか？だから強化する為に俺たちを呼んだ。そう考えれば今の行動や俺がコミュニケーションに入るのを拒否した時の反応に合点がいく。どうよ？百点だろ？」

「つ……………！」

「んで、この事実を隠していたってことはだ。俺達にはまだコミュニケーションを選ぶ権利があると判断できるんだが、その辺どうよ？」

「……………」

「沈黙は是なり、だぜ黒ウサギ。この状況で黙り込んでも状況は悪化するだけだぞ。それともほかのコミュニティに言ってもいいのか？」

「や、だ、駄目です！いえ、待つてくださいい！」

「なら、話してくれませぬ？」

十六夜と伊邪那は川辺にあつた手頃な岩に腰を下ろして聞く姿勢をとる。黒ウサギは伊邪那に諭され腹を括って口を開く。

「分かりました。それでは我々のコミュニティの惨状を語らせていただきます。」

—————

それから、黒ウサギの居るコミュニティの現状とその原因魔王の事や旗印、名前が無い事などを聞いた。

そして、黒ウサギの思いと懇願を聞いた。

「ふうん。魔王から誇りと仲間をねえ」

しかし必死な告白に十六夜は気のない返事で返す。黒ウサギは方を落として泣きそうになる。

(……で断られたら、私たちのコミュニティはもう……………！)

十六夜は足を組み直し、たつぷり三分黙り込んだ後、

「いいな、それ」

「……………は？」

「HA？じゃねえよ。協力するって言ったんだ。もつと喜べ黒ウサギ」

「え…………… あ、あれれ？今の流れってそんな流れでございましたか？」

「そんな流れだったぜ。伊邪那、お前は どうする？」

「私は最初から彼女のコミュニティに入るつもりでしたよ。ただ嘘について気になつていただけですから」

「だとよ。ほれ、ポーとしてないであのへび起こしてさっさとギフト貰ってこい。その後は川の終端にある滝と”世界の果て”を見に行くぞ」

「は、はい!!」

黒ウサギは嬉しそうに跳躍し蛇神の元へ行きギフトを受け取りその後三人で”世界の果て”を見てから噴水広場で合流した。

—————

合流したあと、飛鳥達がフォレス・ガロのリーダーに接触し喧嘩を売る状況になった事について黒ウサギはウサ耳を逆立てて怒り、現在はギフト鑑定のためのコミュニティへ向かっている。向かうの中でコミュニティの現状について改めて説明をし、黒ウサギは騙していたことを誤った。

「申し訳ございません。皆さんを騙すのは気が引けたんですが……黒ウサギ達も必死だったのです」

「もういいわ。私は組織の水準なんてどうでもよかつたの。春日部さんは？」

「私も怒つてない、そもそもコミュニケーションがどうの、というのは別に……あ、けど」

思い出したように迷いながら呟く耀。ジンはテーブルから身を乗り出して問う。

「どうぞ気兼ねなく聞いてください！僕たちにできることなら最低限の用意はさせてもらいます」

「そんな大それたものじゃないよ。ただ……毎日三食お風呂付きの寝床があればいいな、と思ったただだから」

「それなら大丈夫です。十六夜さんがこんなに大きな水樹の苗を手に入れてくれましたから」

そう笑顔でいう黒ウサギにみんなは安心した表情を浮かべた。

その後、ジンと別れた五人と一匹はサウンドアイズというギフト鑑定のコミュニケーションへ向かう。

—————

あれから、この世界は立体交差並行世界論と言う世界だとかを聞いた。そして、サウンドアイズに付いたら店員門前払いされて黒ウサギと店員の口論が始まっていた。

「なるほど、箱庭の貴族であるウサギのお客様を無下にするのは失礼ですね。中で入店許可を伺いますので、コミュニティのなまえをよろしいでしょうか？」

「……………う」

言葉に詰まる黒ウサギ。しかし、十六夜は何のためらいもなく名乗る。

「俺たちはノーネームってコミュニティなんだか」

「ほほう、ではどこのノーネーム様でしょうか？よかつたら旗印を確認させていただいてます。」

ぐつと黙り込む、黒ウサギが言っていた名と旗印が無いコミュニティのリスクとはこういう状況のことだった。黒ウサギは心の底から悔しそうな顔をして小声で呟いた。

「……………私達に……………旗はありま」

「いいいいいやほおおおおお！久しぶりだ黒ウサギイイイイ！」

黒ウサギは店内から出てきた白い物体に突撃されて街道の向こうにある浅い水路まで吹き飛んだ。

「きゃあ—————……………！」

十六夜は目を丸くし、店員は痛そうに頭を抱えていた。

「おい店員。この店はドッキリサービスがあるのか？なら俺も経つバージョンで是非」
「ありません」

「なんなら有料でも」

「やりません」

真剣な表情の十六夜に真剣な表情で返す店員。二人は割とマジだった。

黒ウサギに突撃した白い物体は、黒ウサギの胸に顔を埋めて擦り付けていた。

「し、白夜叉様!?!どうして貴女がこんな下層に!?!」

「そろそろ黒ウサギが来る予感がしておったからに決まっておるだろうに! フフ、ホホホホ! やっぱりさわり心地が違うのう! ほれ、ここがいいかここがいいか?」

スリスリスリスリスリ。

「し、白夜叉様! ちょっと離れてください!」

「白夜叉と呼ばれた少女を無理やり引き離し、頭を挿んで店の方へ向かって投げつける。それを十六夜は足でうけとめた。

「てい」

「ゴバア! お、おんし、飛んできた美少女を足で止めるとは何様だ!」

「十六夜様だぜ。以後よろしくな和装ロリ」

「ヤハハハと笑いながら自己紹介する十六夜。その一連の流れに伊邪那は呆気に取られて見ていた。」

妖刀と外門

「…………… つは！今、一連の流れに呆気にとられてしまいました、その方は？」

「ん？おお、可愛らしいお嬢さんはじめまして。この“サウンドアイズ”の幹部の白夜叉だ。仕事の依頼ならおんしのその華奢な体を借りる事で引き受けるぞ」

その事を聞いてものすごく微妙な表情なってしまう伊邪那を見て店員は注意する。

「オーナーそれでは売上が伸びません。ボスが怒ります。それと、そちらのお嬢さんがドン引きしてます」

「うう…………… まさか私まで濡れることになるなんて」

濡れた服やミニスカートを絞りながら水路から上がってきた黒ウサギは複雑そうにつぶやく。

「因果応報…………… かな」

『お嬢の言う通りや』

悲しげに服を絞る黒ウサギ。

反対に濡れても全く気にしない白夜叉は、店先で十六夜たちを見てニヤリと笑った。

「ふふん。お前達が黒ウサギの新しい同士か。異世界の人間が私の元に来たということ

は……遂に黒ウサギが私のペットに」

「なりません！ どういう起承転結があつてそんなことになるんですか！」

ウサ耳を逆立てながら怒る黒ウサギ。どこまで本気かわからない白夜叉は笑つて店に招く。

「まあいい。話があるなら店で聞こう……ん？ そう言えばあの銀髪の目を閉じた娘は？」

「オーナー、その方でしたら既に店の中の方に」

その言葉に白夜叉は驚いた顔をする。

「ん？ 珍しいな、おんしの事だから旗も持たない”ノーネーム”は店に居れないと思つていたのだが」

「いえ、純粋なお客様の様でしたので。それに、中々のものをお持ちのようでしたので」
店員がそこまで言うのと、店の奥の方から呼ぶ声と一緒に刀を持った伊邪那が出てくる。

「すいませーん。この刀何ですが……おや？ 皆さんどうしたんですか？ 早く中に入つて見てください。すごいですよ。この刀なんて見て下さい。この素晴らしいずっしりとした重みに刀を納刀した際に響く凜つとした音それに……」

いつもより雄弁な伊邪那に呆気にと取られていた十六夜たちだが、飛鳥がハツとして伊

邪那を止める。

「天須さん、ストップ。貴女が刀が好きなのは大体分かったわ」

「そうですか。しかし、なかなかいい存在感の刀です。妖刀の類ですかね。お金あるのなら直ぐにでも買いたいぐらいです」

その様子を見ていた、白夜叉は伊邪那の方へ歩いてゆく。

「おんし、その刀が妖刀だと分かるのか?」

「ええ。見える、見えないに問わず分かるものですよ? こうして普段使っているモノの事です、触れて感じるのもですよ」

そう自分の腰に下げている刀を見せながら話す。

「ふむ、中々のセンスだな。まあ、ここで話し込んでしまうのもあれだからな中に入るとしようか?」

「そうですね」

伊邪那は持っている刀を店員に返してから先に中に入っていく白夜叉達について行く。

「あいにくと店は占めてしまったのでな。私の私室で勘弁してくれ」

五人と一匹は和風の中庭を進み縁側で足を止める。

障子を開けて招かれた場所は香のようなものが焚かれており、風と共に五人の鼻をく

すぐる。

「白夜又は和室の上座に腰を下ろし大きく背伸びしてから十六夜たちに向き直る。気がつけば彼女の着物はいつの間にか乾ききっていた。」

「もう一度自己紹介しておこうかの。私は四桁の門三三四五外門に本拠を構えている”サウンドアイズ”幹部の白夜又だ。この黒ウサギとは少々縁があつてな。コミュニケーションが崩壊してからもちよくちよく手を貸してやっている器の大きな美少女と人しておいてくれ」

「はいはい、お世話になっております本当に」

投げやりな言葉で受け流す黒ウサギ。その隣で耀が小首をかしげる。

「その外門って何?」

「箱庭の階層を示す外壁にある門ですよ。数字が若いほど都市の中心部に近く、同時に強大な力を持つ者達が住んでいるのです」

黒ウサギが描く上空から見た箱庭の図は、外門によって幾重もの階層に分かれています。その図を見た三人は口を揃えて、

「……超巨大タマネギ?」

「いえ、超巨大バームクーヘンではないかしら?」

「そうだな。どちらかと言うとバームクーヘンだ」

うんと頷き合う三人を見てガツクリと肩を落とす黒ウサギ。

「ふふ、うまいことを例える。その例えなら今いる七術の外門はバームクーヘンの一番薄い皮の部分に当たるな。さらに説明するなら、東西南北の四つの区切り東側にあたり、外門のすぐ外は“世界の果て”と向かい合う場所になる。あそこはコミュニティに所属していないものの、強力なギフトを持った者達が住んでおるぞ。その水樹の持ち主などな……して？誰が、どのようなゲームで勝ったのだ？知恵か？勇気か？」

「いえいえ。この水樹は十六夜さんがここにくるまえに、蛇神様を素手で叩きのめしてきたのですよ」

自慢げに黒ウサギが言うと、白夜叉は声を上げて驚いた。

「なんと!? クリアではなく直接的に倒したとな!? ではその童は神格持ちの神童か？」

「いえ、黒ウサギはそう思えません。神格持ち一目見れば分かるはずですし」

「む、それもそうかしかし神格を倒すには同じ神格を持つか、互の種族にほぼ崩れたパワーバランスがある時だけのはず。種族の力というなら人と蛇ではドングリの背比べだぞ」

「そう言えば、白夜叉様とあの蛇神様はお知り合いだったのですか？」

「知り合いもなにも、アレに神格を与えたのは私だぞ。もう何百年も前の話だがの」

小さな胸を張り呵々と豪快に笑う白夜叉。だがそれを聞いた十六夜は物騒に瞳を光

らせて問いたです。

「へえ？じやあお前はあの蛇より強いのか？」

「ふふん、当然だ。私は『階級支配者』だぞ。この東の四桁以下にあるコミュニティでは並ぶ者がいない、最強の主権者なのだから」

”最強の主権者” その言葉に三人は一斉に目を輝かせた。

「そう……ふふ。ではつまり、貴女のゲームでクリア出来れば私たちのコミュニティは東側で最強のコミュニティということになるのかしら？」

「無論そうなるのう」

「そりや景気のいい話だ。探す手間が省けた」

三人はむき出しの闘争心を視線に込めながら白夜叉を見る。白夜叉はそれに気づいたように高らかと笑い声をあげた。

「抜け目の無い童達だ。依頼をしておきながら、私にギフトゲームで挑むと？」

「え？ちよ、ちよつと御三人様!？」

慌てる黒ウサギを後から伊邪那が服を引っ張る。

「まあまあ、落ち着いてください。焦っても良いことありません、お茶でも飲んで落ち着いてください」

「ん？なんだ、おんしはやらんのか？」

黒ウサギを止めている伊邪那を見て白夜叉が聞くと、ニヤリと笑い刀を少し抜きながら答える。

「まさか、そんな筈は無いですか？」

「ふふ、そうか。しかし、ゲームの前に一つ確認しておくことがある」

「何だ？」

白夜叉は着物の裾から“サウンドアイズ”の旗印——向かい合う双女神の紋が入ったカードを取り出し、壮絶な笑みで一言、

「おんしらが望むのは”挑戦”か——もしくは”決闘”か？」

太陽と白夜

「おんしらが望むのは、挑戦か？……もしくは、決闘か？」

刹那、三人の視界に爆発的な変化が起きた。

三人の司会は意味をなくし、様々な情景が脳裏で回転し始める。

記憶にない場所が流転を繰り返し足元から四人を飲み込んでゆく。

四人が投げ出されたのは、白い雪原と凍る湖畔

そして『水平に太陽が廻る

世界』だった。

「なっ……！！！」

あまりの異常さに伊邪那を抜いた三人は同時に息を飲んだ。

箱庭に招待された時とは違うその感覚は、もはや言葉で表現できる御技ではない。

遠く薄明の空にある星は只一つ。緩やかに世界を水平に廻る、白い太陽のみ。

まるで星一つ世界一つを創り出したかのような奇跡の顕現。

「ふむ、世界その物が変わりましたね」

伊邪那は落ち着いて現状を把握し、ほかの三人は啞然と立ち尽くす。

そんな四人に今一度白夜叉は問いかける。

「今一度名乗り直し、問おうかの。私は、白き夜の魔王」——太陽と白夜の星霊・白夜叉。

おんしらが望むのは試練への”挑戦”か？それとも対等な”決闘”か？」

魔王・白夜叉。少女とは思えぬ凄みに、再度息を呑む三人。

「星霊……なるほど、貴女は”与える側”の存在ですか。そして……魔王……ですか……ふむ」

冷静に分析を続ける伊邪那に白夜叉はニヤリと笑う。

十六夜は背中心地いい冷や汗を感じながら、白夜叉を睨んで笑う。

「水平に廻る太陽と……そうか、白夜と夜叉。あの水平に廻る太陽やこの土地は、オマエを表現しているってことか」

「如何にも。この白夜の湖畔と雪原。永遠に世界を薄明に照らす太陽こそ、私が持つゲーム盤の一つだ」

白夜叉が両手を広げると、地平線の彼方の雲海が瞬く間に裂けて、薄明の太陽が晒される。

「これだけの土地がただのゲーム盤……！」

「如何にも、しておんしらの返答は？」挑戦”を望むならば、手慰み程度に遊んでやる。だがしかし”決闘”を望むなら話は別。魔王として、命と誇りの限り戦おうではないか」

「……………っ」

飛鳥と耀、そして十六夜でさえ即答できずに返事をためらった。

白夜叉が如何なるギフトを持つか定かではない。だが勝ち目がないことは一目瞭然だ。しかし自分たちが売った喧嘩を、このような形で取り下げるにはプライドが邪魔した。

しばらくの静寂のあと、諦めたように笑う十六夜がゆっくりと挙手し、

「参った。やられたよ。降参だ白夜叉」

「ふむ？それは決闘ではなく試練を受けるということかの？」

「ああ。これだけのゲーム盤を用意できるんだからな。あんたには資格がある。

いいぜ。今回は黙って『試されてやるよ』、魔王様」

白夜叉は堪えきれず高らかと笑い飛ばした。プライドの高い十六夜にしては最大限の譲歩なのだろうが、『試されてやる』とは随分可愛らしい意地の張り方があったものだと、白夜叉は腹を抱えて哄笑をあげた。

ひとしきり笑ったあと白夜叉は笑いを嘔み殺してほかの二人にも問う。

「く、くく……… して、他の童達も同じか？」

「ええ。私も、試されてあげてもいいわ」

「右に同じ」

害虫を嘔み潰したような表情で返事をする二人。満足そうに声を上げる白夜叉。

一連の流れをヒヤヒヤしながら見ていた黒ウサギは、ホツと胸をなで下ろす。

「も、もう！お互いにもう少し相手を選んでください！階層支配者”に喧嘩を売る新人と新人に売られた”階層支配者”冗談にしても寒すぎます！それに白夜叉様が魔王だったのは、もう何千年も前の話じゃないですか!!」

「何？じゃあ元・魔王様ってことか？」

「はてさて、どうだったかな？… そう言えばと、おんしにはまだ聞いていなかったな？」

そう言つて白夜叉は伊邪那の方に向く。

「さて、おんしが望むのはどちらだ？」

「はて？それに対しての答えは既に言つてあるはず、貴女がこの世界に引きずり込む前に私は貴女と決闘をする意思を出していましたが？」

故、貴女との決闘という答え以外無いわけですが？」

「ほう、圧倒的な力の差を見せつけてなお挑むか………」

蛮勇かそれとも自身の力に

長5 mはあろうかという巨大な獣が翼を広げて空を滑空し、風の如く現れた。

試練と決闘

「グリフォン………嘘、本物!？」

「フン、如何にも。あやつこそ鳥の王にして獣の王。」力　”知恵”　”勇氣”の
全てを備えたギフトゲームを代表する獣だ」

白夜叉が手招きする。グリフォンは彼女の元に降り立ち、深く頭を下げ、礼を示した。

「さて、肝心の試練だがの。おんしら三人とこのグリフォンで”力”　”知恵”　”勇氣”のいづれかを比べ合い、背にあなたがって湖畔を舞うことが出来ればクリア、ということにしようか」

白夜叉が双女神の紋が入ったカードを取り出す。すると虚空から”主催者権限”にのみ許された輝く羊皮紙が現れる。白夜叉は白い指を奔らせて羊皮紙に記述する。

『ギフトゲーム名 ”鷲獅子の手綱”

・プレイヤー一覽

逆廻 十六夜

久遠 飛鳥

春日部 耀

・クリア条件 グリフォンの背に跨り、湖畔を舞う。

・クリア条件 ”力” ”知恵” ”勇氣” の何れかでグリフォンに認められる。

・敗北条件 降参か、プレイヤーが上記の勝利条件を満たせなくなった場合。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の元、ギフトゲームを開催します。

”サウザンドアイズ”印

「私がやる」

読み終わるや否やピシー！と指先まで綺麗に拳手したのは耀だった。彼女の瞳はグリフォンを羨望の眼差しで見つめている。比較的になんか彼女にしては珍しく熱い視線だった。

「ふむ。自信があるようだが、これは結構な難物だぞ？」

「大丈夫、問題ない」

耀の瞳は真っ直ぐにグリフォンに向いている。キラキラと輝くその瞳は、探し続けた宝物を見つけた子供のように輝いていた。

「OK、先手は譲ってやる。失敗するなよ」

「気をつけてね、春日部さん」

「うん、頑張る」

春日部はグリフォンに近きまず慎重に話しかけた。

「えーと。初めまして、春日部耀です」

『!?!』

「ほう、あの娘、グリフォンと言葉を交わすか」

白夜又は感心したように扇を広げる。

「私を貴方の背に乗せ、誇りを賭けて勝負をしませんか？」

「なに!?!」

「貴方の飛んできたあの山脈、あそこを白夜の地平から時計回りに大きく迂回し、この湖畔を終着点とします。貴方は湖畔までに私を振るい落とせば勝ち、私が背に乗つていられたら私の勝ち。……… どうかかな？」

グリフォンは如何わしげに大きく鼻を鳴らして尊大に問い返す。

『お前は、私に誇りをかけろと持ちかけた。確かに娘一人を振るい落とせないならば、私の名誉は失墜するだろう。だがな小娘。誇りの対価に、お前は何を賭す?』

「命を賭けます」

即答だった。あまりにも突飛すぎる返答に、黒ウサギと飛鳥から驚きの声が上がつ

た。

「だ、ダメです!」

「か、春日部さん!? 本気なの!」

耀の提案に慌てる黒ウサギと飛鳥。それを白夜叉と十六夜、伊邪那は厳しい声で制す。

「双方、下がらんか。これはアノ娘から切り出した試練だぞ」

「ああ。無粋なことはやめておけ」

「少し、お茶でも飲んで落ち着いては?」

「そういう問題ではありません。同士にこんな分の悪いゲームをさせるわけには……」
と云うよりまだお茶飲んでたんですか!」

グリフォンはしばし考える仕草を目見せたあと頭を下げて乗るように促す。

『乗るがいい若き勇者よ。我が疾走に耐えられるかその身で試してみよ』

耀は頷き、手網を握って背に乗り込む。

「始める前にひとつだけ……私、貴方の背に跨るのが夢だったんだ」

『そうか』

決闘前に何を口走っているのやら、グリフォンは苦笑してこそばゆいとばかりに翼を三度羽ばたかせる。前傾姿勢を取るや否や、大地を踏み抜くようにして、薄明の空に飛

び出す。

結果を述べるなら、春日部は勝利した。

春日部の試練が終わり、しばらくは春日部のギフトに関しての話題になっていた。そして、白夜叉は伊邪那那の方に向き直る。

「またせたな、ではさっそくおんしとの決闘を始めるとしようか？」

「いえいえ、全然待つてなどおりませんよ？それにおかげで貴女を倒すイメージはだいたいできました」

「それは楽しみだの。ルールは簡単でいいだろう。どちらかが負けを認めたら終了だ。これで良いか？」

白夜叉は羊皮紙を出しながら、伊邪那にそう言い終わると羊皮紙を伊邪那に投げ渡す。

『ギフトゲーム名 ”真剣勝負”』

・ プレイヤー一覧

天須 伊邪那

- ・クリア条件 相手に負けを認めさせる。または戦闘不能にする。
 - ・クリア方法 白夜叉との戦いに挑み勝敗を決める。
 - ・敗北条件 自分の負けを認める。または自身が戦闘不能になる。
- 宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

”サウザンドアイズ”印』

伊邪那は手でなぞりながら文字を読み静かに頷いて了承の意を示す。

「でははじめるとしようかの。黒ウサギは合図を頼む」

白夜叉がそう言い終わると同時に、二人は前に出る。

白夜叉は、扇子を閉じて伊邪那の様子を見る。

伊邪那は刀の柄に手を添えて白夜叉に対面する形をとる。

その場の雰囲気は鋭く突き刺さる様な空気になる。その空気に冷や汗を流しながら黒ウサギは合図を出す。

「それでは、決闘………始め!!」

黒ウサギが言い終わると同時に伊邪那は瞬時に白夜叉の懐に潜り込み刀を振る。

しかし、白夜叉も扇子で刀を防ぐ。

激しい火花を散らしながら金属のぶつかる音が白夜の世界に響き渡った！

天須 伊邪那のすてーたす

今回は自分で書いた伊邪那のステータスと容姿のイラストだけです。
下手くそですがこんな感じですよ。

絵が上手い人がいたらイラストお願いします。

ステータス

性別……女

容姿……画像参照です。

身長……149cmぐらいですかね？

体重……測ったことがないですね。

スリーサイズ……不明

誕生日……不明

血液型……不明

趣味……刀鑑賞及び蒐集

好きな物…… 刀、和服、甘味、猫

嫌いな物…… 家族、???

特技…… 居合抜き、刀の鑑定、高速移動、超感覚

好きな言葉…… 一刀両断

口癖…… おや?、敬語

伊邪那から見た現在出会った人達の印象

十六夜…… 強く、頭も回るすごい人です。色々と油断できない人ですね。

飛鳥…… 十六夜と仲が悪いが、友達を大切にするタイプですね。

耀…… 無口であり感情が感じられませんが、優しいいい人です。あと猫が可愛いです。

黒ウサギ…… なんと言うか、落ち着きが無くドジっ娘? 何ですかね?

蛇神…… ご愁傷さまです。

店員さん…… 刀を見せてくれる優しい人です。あと、お菓子が美味しいです。

白夜叉…… 変態。慢心が過ぎます。そんなことでは、足元をすくわれますよ? 最強の主権者(笑)さん?

周りから見た伊邪那

十六夜……：なんか凄いやつだな、あの超感覚はどうなっているんだ？

飛鳥……：よく分からない人だけど、面白い人ね。あと、刀に関した時のテンションはびつくりしたわ。

耀……：あまり喋らない人、たまに三毛猫見てるけど猫が好きなのかな？友達になれたらいいな。

黒ウサギ……：常識人なのですよ。何かと助かってますが、たまにとんでもない行動をするのでびつくりです。あと敬語なのでキャラがかぶってる気が……

店員さん……：たまに来ては、刀を見えますね。やはりまともなお客様ですので話もしやすいですよ。あと、お菓子はまだまだありますのでいつでも来てください。（お菓子食べてる姿可愛いです）

白夜叉……：全く、私に会えばやれ慢心だの…… おんしは私の親か!?と云うか刀の鑑賞するだけでなく、私の部屋で着せ替えをしても良いか?え?いや?それよりも最近店員の様子が可笑しいのだが、おんしなんか知らんか?あと、私の秘蔵のお菓子がいくつか消えているのだが何か知らんか?

こんな感じですが今回はここまでです。イラストの方はできる方がいたらお願いし

